

合同会社 竹内農園（北広島市）

○基礎情報【経営面積】3.9ヘクタール

【作付品目】主に、ズッキーニ、小松菜、長ねぎ、調理用トマト、ニンジン、スナップエンドウなど
15種類ほど

【従業員】夫婦、社員1名、アルバイト3名、福祉事業所2法人4事業所

<問合せ先>合同会社竹内農園（080-1898-5258）

1 農福連携に取り組んだ経緯

代表の竹内氏は北海道出身で、大学卒業後、民間企業に就職、本州勤務や海外勤務をする中で、北海道の活性化に寄与したいとの考えの下、北海道の基幹産業である農業に福祉を融合させた事業展開を模索し始める。

民間企業を退社し、知的障がい者の福祉施設に転職。その後、福祉施設の紹介により平成23年（2011）年から道央農業振興公社の研修生として、主に恵庭市に所在する農業生産法人で研修を開始。研修を受けながら、新規就農に向けて、連携することが可能な福祉団体を探看中、就農予定地近隣に所在する就労継続支援B型事業所（以下「福祉施設」という。）と出会い、平成26年（2014年）、新規就農段階から農業と福祉を連携させた農場として合同会社竹内農園を開園。

2 取組内容等

業務委託契約に基づいた施設外就労として、知的に障がいがある方たちを中心に、福祉事業所の時間にあわせて農作業を提供。

障がい者は福祉施設の車の送迎により、圃場まで通勤。

作業内容は、肥料まき、定植、草取り、軽量、袋詰め、バーコード貼り等を福祉施設職員の指示に基づき作業を実施。

自宅に引きこもることが多かった人が毎日の農作業に参加できたり、体力回復を実感したりしているほか、良い疲労感があることで、薬の量が減った、規則正しい生活となり夜に寝られるようになったという声や、これまで全く野菜を食べない生活をしていた者が、農作業に関わることで野菜に関心を持ち、自ら買ってきて食べるようになるなど、精神面・健康面ともに良い影響が顕著に出ている。また、福祉事業所が、農園の野菜を買ってくれるといった副次的な効果や、農作業の効果は利用者だけではなく、福祉施設の指導員にもおよび、野外での作業はリフレッシュにつながっている。障がい者にとっては、自らが種まきから袋詰めまで手をかけた野菜が商品となることや、「自分が竹内農園を支えている」、「竹内が困っているから手伝いに行っ



3 取組のポイント等

作物の選定から福祉的な視点を取り入れ、大型機械を要するような作物の栽培を除外、健常者なら一人で機械を使って流れ作業でこなすような作業でも、作業工程を細分化・単純化し、障がい者それぞれの適性に応じた様々な仕事を創出し、複数の障がい者が働けるように工夫するなど、可能な限り多くの作業を障がい者に任せることで、障がい者が主体となって働ける環境を整備。

作業機械については、投資抑制の意味も含めて大型化せず、安価な小型農機を導入し、障がい者が安全に作業できるよう配慮したうえで、できるだけ手作業が生じるように作業体系を構築。

農業と福祉を融合する農業経営を行うことを事業テーマに、中小企業庁の「地域需要創造型等起業・創業促進事業」を活用。

令和4年には、福祉事業所職員向けのマニュアル整備等を目的として、農林水産省の農山漁村振興交付金を活用し、株式会社デンソー北海道の指導を受けながら整備を進めた。

平成30年8月 当時の天皇皇后両陛下の視察

令和3年第11回コープさっぽろ農業賞ビジネスモデル賞優秀賞受賞

4 今後の予定や将来展望

取組を進める中で、改善点が日々顕在化しており、障害者の通年での安定雇用を農業で実現できないかと日々奮闘。仕事をもっと細分化することで、障がい者の作業が広がると考えている。